

大齋第4週金曜日第7調の 先 備 聖 體 禮 儀

【 第九時課 (第六時課から続く時は2ページの【 常例の聖詠 】から) 】

司祭) 我^{われ}等^らの神^{かみ}は恒^{つね}に崇^{あが}め讃^ほめらる、今^{いま}も何時^{いつ}も世^よ世^よに、



誦^{よみ}經^{きやう}) 我^{われ}等^らの神^{かみ}よ、光^{こう}榮^{えい}は爾^{なんぢ}に歸^きす、光^{こう}榮^{えい}は爾^{なんぢ}に歸^きす、

天^{てん}の王^{おう} 慰^{なぐさ}むる者^{もの}よ、眞^{しん}實^{じつ}の神^{しん}、在^あらざる所^{ところ}なき者^{もの}、満^みたざる所^{ところ}なき者^{もの}よ、萬^{ばん}善^{ぜん}の寶^{ほう}蔵^{ぞう}

なる者^{もの}、生^{せい}命^{めい}を賜^{たま}うの主^{しゅ}よ、來^{きた}りて我^{われ}等^らの中^{うち}に居^おり、我^{われ}等^らを諸^{もろ}の穢^{けが}れより潔^いくせよ。

至^し善^{ぜん}者^{しゃ}よ、我^{われ}等^らの靈^{たましい}を救^{すく}い給^{たま}え。

聖^{せい}なる神^{かみ}、聖^{せい}なる勇^{ゆう}毅^き、聖^{せい}なる常^{じょう}生^{せい}の者^{もの}よ、我^{われ}等^らを憐^{あわれ}めよ。

聖^{せい}なる神^{かみ}、聖^{せい}なる勇^{ゆう}毅^き、聖^{せい}なる常^{じょう}生^{せい}の者^{もの}よ、我^{われ}等^らを憐^{あわれ}めよ。

聖^{せい}なる神^{かみ}、聖^{せい}なる勇^{ゆう}毅^き、聖^{せい}なる常^{じょう}生^{せい}の者^{もの}よ、我^{われ}等^らを憐^{あわれ}めよ。

光^{こう}榮^{えい}は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に歸^きす、今^{いま}も何時^{いつ}も世^よ世^よに、アミン。

至^し聖^{せい}三^{さん}者^{しゃ}よ我^{われ}等^らを憐^{あわれ}めよ、主^{しゅ}よ我^{われ}等^らの罪^{つみ}を潔^いくせよ、主^{しゅ}宰^{さい}よ我^{われ}等^らの愆^{ゆる}を赦^{せい}せ、聖^{せい}な

る者^{もの}よ臨^{のぞ}みて我^{われ}等^らの病^{やまい}を癒^{いや}し給^{たま}え、悉^{ことごと}く爾^{なんぢ}の名^なに因^よる。

主^{しゅ}憐^{あわれ}めよ、主^{しゅ}憐^{あわれ}めよ、主^{しゅ}憐^{あわれ}めよ、

光^{こう}榮^{えい}は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に歸^きす、今^{いま}も何時^{いつ}も世^よ世^よに、アミン。

天^{てん}に在^{いま}す我^{われ}等^らの父^{ちち}よ、願^{ねが}わくは爾^{なんぢ}の名^なは聖^{せい}とせられ、爾^{なんぢ}の國^{くに}は來^{きた}り、爾^{なんぢ}の旨^{むね}は天^{てん}に 行^{おこな}

わるるが如^{ごと}く地^ちにも行^{おこな}われん。我^{わが}日^{にち}用^{よう}の糧^{りやう}を今^{こん}日^{にち}我^{あた}等^たに與^{たま}え給^{われ}え。我^{われ}等^らに債^おいめある者^{もの}を我^{われ}等^ら

免^{ゆる}すが如^{ごと}く我^{われ}等^らの債^おいめを免^{ゆる}し給^{たま}え。我^{われ}等^らを誘^いぎないに導^{みち}かず、猶^な我^{われ}等^らを凶^き悪^{よく}より救^{すく}い給^{たま}え。

司^し祭^{さい}) 蓋^{けだ}しくに 國^{けん}と權^{けん}能^{のう}と光^{こう}榮^{えい}は爾^{なんぢ}父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に歸^きす、今^{いま}も何時^{いつ}も世^よ世^よに、



ア ミ ン。

誦經) ^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、

^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、^{しゅあわれ}主 憐 ^{しゅあわれ}めよ、

^{こうえい}光 ^{ちち}榮は父と子と^こ聖 ^{せいしん}神に^き歸す、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に、アミン。

【 常例の聖詠 】 (第六時課から続く時はここから)

^{きた}來れ、^{われら}我等の^{おう}王・^{かみ}神に^{こうはい}叩 拜せん。

^{きた}來れ、^{われら}ハリストス・^{おう}我等の^{かみ}王・^{こうはいふふく}神に叩 拜俯伏せん。

^{きた}來れ、^{われら}ハリストス・^{おう}我等の^{かみ}王と^{まえ}神の前に^{こうはいふふく}叩 拜俯伏せん。

【 第83聖詠 】

^{ばんぐん}萬軍の主よ、^{しゅ}爾の住所は何ぞ^{なんぢ}愛すべき。我が^{たましい}靈は厚く慕いて^{あつ}主の庭を望み、我が^{しゅ}心

^わ我が身は^{せい}生活の神に馳す。^{ばんぐん}萬軍の主、我が^わ王、我が^{かみ}神よ、^{すずめ}雀も己の^{おのれ}宿を獲、^え燕も己の

^す巢を獲て、^{ひな}雛を爾が^{さいだん}祭壇の^{かたわら}傍に置く。爾の家に住む者は^{なんぢ}福なり、^い彼等は常に^え爾を讚

^め揚げん。^{ちから}力を爾に^{なんぢ}恃み、^{たの}心の路を爾に向くる人は^む福なり。^{ひと}彼等は^{さいわい}涙の谷を過り

^{そのうち}て、^{いづみ}其中に^え泉を得、^{あめ}雨は降福にて之を覆う、^{これ}彼等は^{おお}力より^{かれら}力に進み、^{ちから}シオンに於て^{すす}神の

^{まえ}前に^{あらわ}顯る。^{しゅ}主、^{ばんぐん}萬軍の神よ、我が^わ禱を^い聽け、^{かみ}イアコフの神よ、^き聽き納れ^{たま}給え。神、^{かみ}我等を^{われら}衛

^{しゅ}る主よ、^ふ俯して^{なんぢ}爾が^{あぶら}膏つけられし者の^{もの}面を^{おもて}視よ。^み蓋一日^{けだし}爾の庭に^い在るは^{せん}千日に^{まさ}勝る、

^{われ}我^{あく}悪者の^{まく}幕に住まんよりは、^す寧^{むしろ}神の家の^い闕の^{しきみ}側に^{かたわら}居らん。^お蓋^{けだし}主神は^{しゅ}日なり、^ひ盾なり、

^{しゅ}主は^{おん}恩寵と^{こうえい}光榮とを^{たま}賜う、^{おこ}行の^{きず}玷なき者より^{もの}幸福を^{こう}奪わず。^{うば}萬軍の主よ、^{ばんぐん}爾を^{しゅ}恃む

^{ひと}人は^{さいわい}福なり。

【 第84聖詠 】

^{しゅ}主よ、^{なんぢ}爾は^{すで}已に^{あわれみ}憐を^{なんぢ}爾の地に^ち施し、^{ほどこ}イアコフの^{とりこ}俘を^{かえ}歸せり、^{なんぢ}爾の民の^{たま}不法を^{ふほう}赦し、

^{そのすべ}其^{つみ}凡ての罪を^{おお}掩い、^{なんぢ}爾が^{ことごと}悉くの^{いかり}忿を^や罷め、^{なんぢ}爾が^{いかり}怒の^{はげ}烈しきを^{のぞ}除き^{たま}給えり。我が^わ救

^{かみ}の神よ、^{われら}我等を^お起こし、^{なんぢ}爾が^{われら}我等に^お於ける^{いきどおり}憤を^と釋き^{たま}給え。豈に^あ永く^{なが}我等を^{われら}忿り、^{いかり}爾の怒

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、^{かみ こうえい なんち き}神よ光 榮は 爾 に 歸す。

【 指定された坐 誦 經 (通常は省略) 】

^{しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ}
主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

【 第九時課の讚詞 】

司祭) ^{だいくじ われら ため み し な}第九時に我等の爲に身にて死を嘗めし^{かみ}ハリストス神よ、^{わ にくたい おもい ころ}我が肉 體の 念 を 殺して我等を救い給え。



司祭) ^{しゅ ねがわ わ よぶこえ なんち かんばせ まえ ちかづ なんち ことば より われ さと たま}主よ願くは我が籲聲は爾が顔の前に邇かん、爾の言に依て我を悟らせ給え。



司祭) ^{ねがわ わ いのり なんち かんばせ まえ いた なんち ことば より われ すく たま}願くは我が禱は爾が顔の前に至らん、爾の言に依て我を救い給え。



司祭) ^{こうえい ちち こ せいしん き}光 榮は父と子と聖 神に歸す、

誦 經) ^{いま いつ よよ}今も何時も世に、アミン。

^{われら ため どうていぢよ うま じゅうじか くぎ}我等の爲に童 貞 女より生れ、^{しの かみ}十字架に釘うたるるを忍び、神なるに依りて死にて死を 滅 し、

^{ふくかつ あらわ じんじ しゅ なんち て つく もの す なか じれん しゅ なんち ひと あい}復活を 顯 しし仁慈なる主よ、爾の手にて造りし者を棄つる勿れ、慈憐の主よ、爾が人を愛

する愛を顯して、我等の爲に祈禱する所の爾を生みし生神女を受け給え、我が救主よ、
望を失える人人を救い給え。

爾の名に因りて我等を終まで棄つる勿れ、爾の盟約を破る勿れ、爾の憐を我等よ
り除く勿れ、爾が愛する所のアブラアムと、爾の僕イサクと、爾の聖なるイスライリと
に因りてなり。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

至聖三者よ我等を憐めよ、主よ我等の罪を潔くせよ、主宰よ我等の愆を赦せ、聖な
る者よ臨みて我等の病を癒し給え、悉く爾の名に因る。

主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行
わるるが如く地にも行われん。我日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債ある者を我等
免すが如く我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い給え。

司祭) 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、



誦經) 盜賊は生命の首が十字架に懸れるを見て曰えり、我等と共に釘うたれし者は、若し身を取り
し神に非ずば、日は其光線を隠さず、地も戦い慄かざらん、萬の事を忍ぶ主よ、爾の國
に於て我を憶い給え。

光榮は父と子と聖神に歸す、

爾の十字架は二人の盜賊の間 に在りて義の權衡と爲れり、一人は謗の重きを以て地獄に

くだ ひとり つみ と かる のぼ かみ こうえい なんぢ き さんよう さと
降され、一人は罪を釋かれ軽く昇せられて、ハリストス神よ、光榮は爾に歸すと讃揚するを悟

れり。

いま いつ よよ
今も何時も世世に、アミン。

なんぢ う もん なんぢこひつじ ぼくしゃ せかい きゆうしゆ じゆうじか あ み な い
爾を生みし者は爾 羔にして牧者たる世界の救主が十字架に在るを見て、泣きて曰えり、
わ こわ かみ せかい すくい え よろこ われ なんぢ しゆうじん ため しの くぎ み ころ
吾が子吾が神よ、世界は救を獲て喜び、我は爾が衆人の爲に忍びて釘うたるるを見て心
や
を灼けり。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

いづれ ひいづれ とき てん ち こうはいさんえい かんじん こうじ しぜん ぎじん あい
何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讃榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして義人を愛し、

ざいにん あわれ らいせい ふく やく よろづ もん すくい まね かみ なんぢしゅ みづか わ
罪人を憐み、來世の福を約して萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我

こ とき いのり う われら いのち なんぢ いましめ むか たま われら たましい せい からだ
が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向わしめ給え、我等の靈を聖にし、體

いさぎよ おもんばかり なお おもい きよ われら ことごと うれい わざわい やまい すく
を潔くし、慮を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救い、

なんぢ せい てんし もつ われら めぐ われら そのかこみ まも みちび しん いつ なんぢ ちか
爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近

がた こうえい さと いた たま けだしなんぢ よよ あが ほ
づき難き光榮を悟るに至らせ給え、蓋爾は世世に崇め讃めらる、アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
主 憐めよ、主 憐めよ、主 憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

とうと なら さか みさお やぶ かみことば う じつ
ヘルヴィムより尊くセラフィムに並びなく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし、實の

しょうしんぢよ なんぢ あが ほ
生神女たる爾を崇め讃む。

しんぶ しゅ な もつ ふく くだ
神父よ、主の名を以て福を降せ、

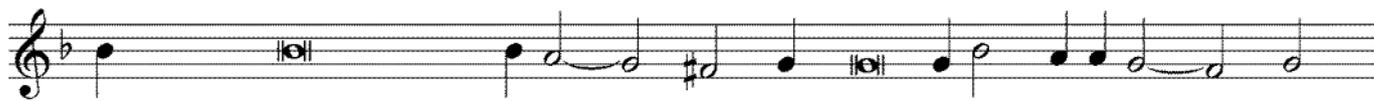
かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんぢ かんばせ もつ われら たら ならび われら
司祭) 神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾が顔を以て我等を照し、並に我等

あわれ たま
を憐み給え、

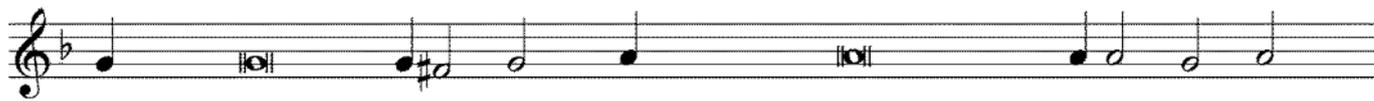




ば な り 。



しゅよ、なんちのくににきたらんと き われらをおも いたま え 。
主 爾 國 來 時 我 等 憶 給



なくものはさいわいな り 、かれらなぐさめをえんとすればな り 。



しゅよ、なんちのくににきたらんと き われらをおも いたま え 。
主 爾 國 來 時 我 等 憶 給



おんじゅうなるものはさいわいな り 、かれらはちをつがんとすれば
温 柔 者 福 彼 等 地 嗣



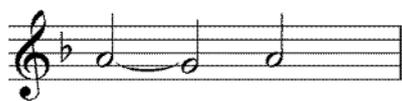
な り 。



しゅよ、なんちのくににきたらんと き われらをおも いたま え 。
主 爾 國 來 時 我 等 憶 給



ぎにうえかわくものはさいわいな り 、かれらあくをえんとすれば
義 飢 渴 者 福 彼 等 飽 得



な り 。



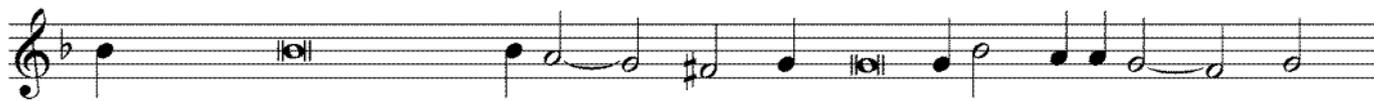
しゅよ、なんちのくににきたらんと き われらをおも いたま え 。
主 爾 國 來 時 我 等 憶 給



あわれみあるものはさいわいな り 、かれらはあわれみをえんとす
矜 恤 者 福 彼 等 矜 恤 得



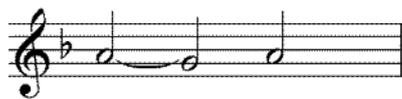
ればな　　り　　。



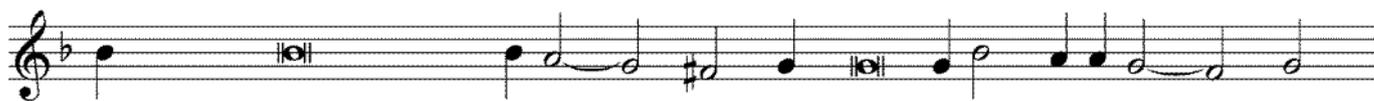
しゅよ、なんぢのくににきたらんと　　き　われらをおも　いたま　え　。
主　爾　國　來　時　我　等　憶　給



こころのきよきものはさいわいな　　り　、かれらかみをみんとすれば
心　清　者　福　　、　彼　等　神　見



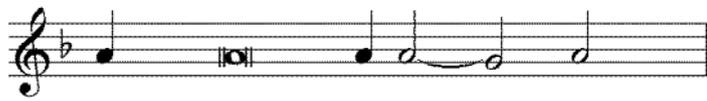
な　　り　　。



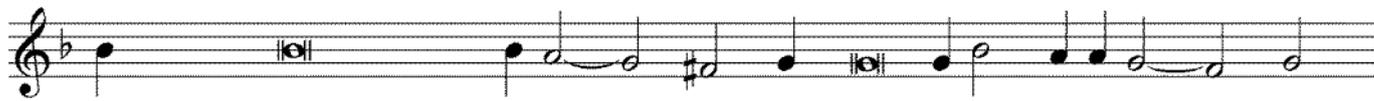
しゅよ、なんぢのくににきたらんと　　き　われらをおも　いたま　え　。
主　爾　國　來　時　我　等　憶　給



わへいをおこなうものはさいわいな　　り　、かれらかみのことなづ
和　平　行　者　福　　、　彼　等　神　子　名



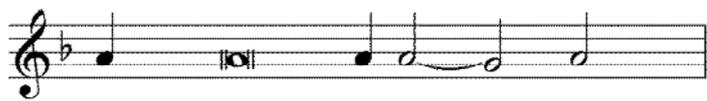
けられんとすればな　　り　　。



しゅよ、なんぢのくににきたらんと　　き　われらをおも　いたま　え　。
主　爾　國　來　時　我　等　憶　給



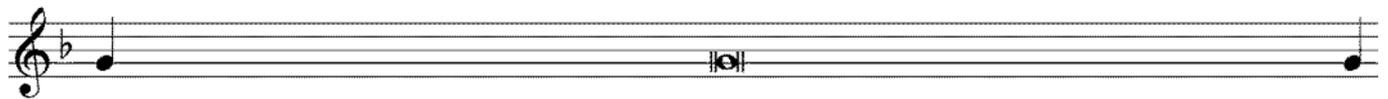
ぎのためいきんちくせらるるものはさいわいな　　り　、てんごくはかれ
義　為　窘　逐　者　福　　、　天　國　は　彼



ら　の　もの　な　れ　ば　な　　り　　。
等



しゅよ、なんぢのくににきたらんと　　き　われらをおも　いたま　え　。
主　爾　國　來　時　我　等　憶　給



ひとわれのために なんぢらをののしり、 きんちくし なんぢらのことをいつわりて
人 我 爲 爾 等 話 窘 逐 爾 等 事 譎



もろもろのあしきことばをいわんときは、なんぢらさいわいな り。



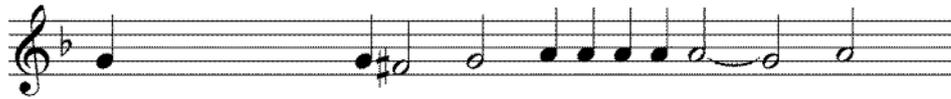
しゅよ、なんぢのくににきたらんと き われらをおも いたま え。



よろこびたのしめよ、てんにはなんぢらのむくいおおければな り。



しゅよ、なんぢのくににきたらんと き われらをおも いたま え。



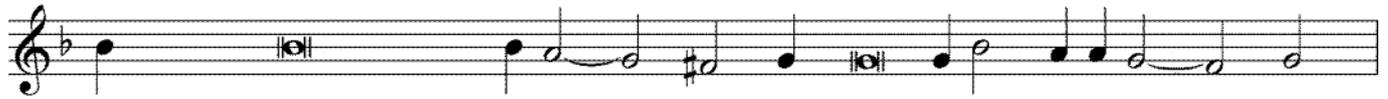
こうえいはちとこ と せいしんにき ず。



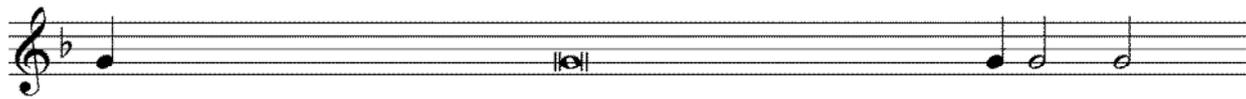
しゅよ、なんぢのくににきたらんと き われらをおも いたま え。



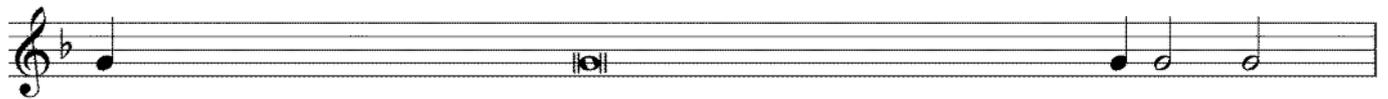
いまもいつ も よよ に、アミン。



しゅよ、なんぢのくににきたらんと き われらをおも いたま え。



しゅよ、なんぢのくににきたらんと き われらをおも いたま え。



しゅさいよ、なんぢのくににきたらんと き われらをおも いたま え。



せ い な る も の よ 、 な ん ち の く に に き た ら ん と き 、
 聖 い な る 者 爾 國 來 ら 時

わ れ ら を お も い た ま え 。
 我 等 を 憶 い 給 え 。

誦經) てんぐんなんぢ うた い せい せい せい かなしゅ なんぢ こうえい てんち あまね
 天軍 爾 を 歌いて 曰う、聖、聖、聖なる哉 主サヴァオフ、 爾 の 光 榮は 天地に 徧 し。

め あ かれ あお もの て かれら おもて ほぢ う
 目を 擧げて 彼を 仰ぐ 者は 照らされたり、 彼等の 面 は 愧 を 受けざらん。

てんぐんなんぢ うた い せい せい せい かなしゅ なんぢ こうえい てんち あまね
 天軍 爾 を 歌いて 曰う、聖、聖、聖なる哉 主サヴァオフ、 爾 の 光 榮は 天地に 徧 し。

こうえい ちち こ せいしん き
 光 榮は 父と子と 聖 神に 歸す、

せいてんしおよ てんししゅ むれ しゅうてんぐん とも なんぢ うた い せい せい せい かなしゅ
 聖 天使 及び 天使 首の 群は 衆 天軍と 共に 爾 を 歌いて 曰う、聖、聖、聖なる哉 主サヴァ

オフ、 なんぢ こうえい てんち あまね
 爾 の 光 榮は 天地に 徧 し。

いま いつ よよ
 今も 何時も 世世に、 アミン。

われしん ひとつ かみ ちち ぜんのうしや てん ち み み ばんぶつ つく しゅ またしん
 我 信ず、 一 の 神・父・全 能者、 天と地、 見ゆると 見えざる 萬 物を 造りし 主を。 又 信ず、

ひとつ しゅ かみ どれい こ よろづよ さき ちち うま ひかり ひかり まこと
 一 の 主 イイスス ハリストス 神の 獨 生の子、 萬 世の 前に 父より 生れ、 光 よりの 光 、 眞 の

かみ まこと かみ うま もの つく あら ちち いたい ばんぶつかれ つく われら
 神よりの 眞 の 神、 生れし 者にて 造られしに 非ず、 父と 一體にして 萬 物 彼に 造られ、 我等

ひとびと ため またわれら すくい ため てん くだ せいしんおよ どうていじょ み と ひと な
 人 人の 爲、 又 我等の 救 の 爲に 天より 降り、 聖 神 及び 童 貞 女 マリヤより 身を取り 人と 爲り、

われら ため とき じゅうじか くぎ くるしみ う ほうむ だいさんじつ せいしよ
 我等の 爲に ポンティイピラトの 時、 十 字 架に 釘 うたれ 苦 を 受け 葬 られ、 第 三 日 に 聖 書 に

かな ふくかつ てん のぼ ちち みぎ ざ こうえい あらわ い もの し もの しんぱん ため
 應いて 復 活し、 天に 升り 父の 右に 坐し、 光 榮を 顯 して 生ける 者と 死せし 者とを 審 判する 爲

またきた そのくにおわり またしん せいしん しゅ いのち ほどこ もの ちち い ちちおよ
 に 還 來り、 其 國 終 なからんを。 又 信ず、 聖 神・主・生 を 施す 者、 父より 出で、 父 及び

こ とも おが ほ よげんしや もつ かつ い またしん ひとつ せい おおやけ しと
 子と 共に 拜まれ 讃められ、 預 言者 を 以て 嘗て 言いしを。 又 信ず、 一 の 聖なる 公 なる 使徒の

きょうかい われみと ひとつ せんれい もつ つみ ゆるし う われのぞ ししや ふくかつ ならび らいせ
 教 會を。 我 認む、 一 の 洗 礼、 以て 罪の 赦 を 得るを。 我 望む、 死者の 復 活、 並 に 來世

いのち
 の 生命を、 アミン。

かみ わ じゅう じゅう ことば おこない し し ひる よる おもい ころ
 神よ、 我が 自由と 自由ならざると、 言 と 行 と、 知ると 知らざると、 晝に 夜に、 思 と 心 に

おか もろもろ つみ なた これ と これ ゆる じんじ ひと あい しゅ みなわれら ゆる
 て 犯しし 諸 の 罪を 宥め、 之を 釋き、 之を 赦せ、 仁慈にして 人を 愛する 主よ、 皆 我等に 赦し

たま
 給え。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん おこな
 天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行
 わるるが如く地にも行われん。我日用の糧を今日我等に與え給え。我等に債ある者を我等
 ゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら きょうあく すく たま
 免すが如く我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、



誦經) あま じゅうじか あ かみ なんぢ どうめい あらた すまい なんぢ めぐみ た たま
 甘んじて十字架に擧げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の恵を垂れ給
 え、爾の力を以て此を樂ませ、其諸敵に勝たしめ給え、此爾が和平の武器、勝たれぬ勝
 もつ そのたすけ
 を以て其助とすればなり。

こうえい ちち こ せいしん き
 光榮は父と子と聖神に歸す、

ハリストスよ、爾が奴婢の靈を諸聖人と偕に、疾も悲も歎もなく、惟終なき
 いのち ところ やす たま
 生命のある處に安んぜしめ給え。

いま いつ よよ
 今も何時も世々に、アミン。

ハリストティアニン等の辱を得ざる轉達、造物主の前に變らざる中保よ、罪なる者の禱の
 こえ しりぞ なか じんじ よ すみやか われら たす たま けだしわれらせつ なんぢ よ
 聲を斥くる勿れ、仁慈なるに依りて速に我等を助け給え、蓋我等切に爾に呼ぶ、

しょうしんぢよ なんぢ とうと もの つね かわ いそ いの せつ もと たま
 生神女よ、爾を尊む者に常に代りて、急ぎて禱り、切に求め給え。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ
 主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

ヘルヴィムより尊くセラフィムに並びなく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし、實の

しょうしんぢよ なんぢ あが ほ
 生神女たる爾を崇め讃む。

しんぶ しゅ な もつ ふく くだ
 神父よ、主の名を以て福を降せ、

司祭) かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんぢ かんばせ も われら たら ならび われら
 神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾が顔を以て我等を照し、並に我等を

あわれ たま
 憐み給え、



アミン。

【 聖エフレムの祝文 】

司祭) しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか
主、我が生命の主 宰よ、怠 惰と愁悶と陵駕と空 談の 情 を我に與うる勿れ、

みさお へりくだり ころえ あい ころろ われなんぢ ぼく あた たま
貞操と謙 遜と忍耐と愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え、

ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ
嗚呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、

アミン。

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま
神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、神よ我罪人を浄め給え、

しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと ころろ われ あた なか みさお へりくだり
主、我が生命の主 宰よ、怠 惰と愁悶と陵駕と空 談の 情 を我に與うる勿れ、貞操と謙 遜

ころえ あい ころろ われなんぢ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ
と忍耐と愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え、嗚呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せ

ざるを賜え、蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

誦經) しせい さんしゃ いつせい けんぺい わか くに ばんぜん みなもと われざいにん ため おもんばか たま
至聖なる三者、一 性の權柄、分れざる國、萬善の 源 よ、我罪人の爲にも 慮 り給

え。我が心 を固め、之を悟らせ、我が 諸 の汚 を除き給え。我が智識を照し、我に常に讃 榮

さんしょうこうはい とな たま せい いつ しゅ いつ かみちち こうえい あらわ
讃 頌 叩 拜して誦えさせ給え、聖なるは一、主なるは一、神 父の光 榮を顯 すイイスハリ

ストスなり、アミン。

しんじゃ きた いのち ほどこ き ふくはい むかしてき いつらく えば われら ふく うば
信 者よ、來りて、生命を 施 す木に伏 拜せん。昔 敵は逸 樂を餌にして我等より福を奪い、

われら かみ とお もの な いま こうえい おう あまん そのうえ て の
我等を神より遠ざけられし者と爲せり、今ハリストス光 榮の王は甘 じて其 上に手を舒べて、

われら はじめ ふく あ たま しんじゃ きた せい き ふくはい われら これ もつ み
我等を 初 の福に擧げ給えり。信 者よ、來りて、聖なる木に伏 拜せん、我等は、此を以て見え

てる敵の 首 を碎くに堪うる者と爲れり。諸 族 諸 民よ、來りて、歌を以て主の 十 字 架を尊

まん。墜ちたるアダムの 全 き救 なる 十 字 架よ、慶 べ、虔 誠なる諸 王は 爾 を以て 詔 と爲

す、 爾 の 力 に因りて異 民を制 服すればなり。我等ハリストティアニンは今 畏 を以て 爾 に接

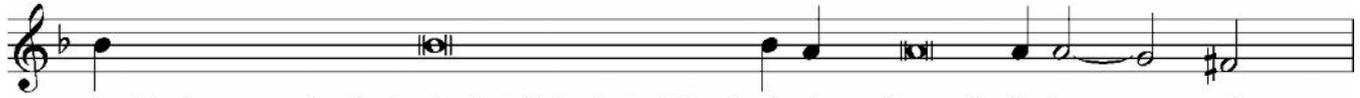
ぶん なんぢ うえ てい かみ さんえい い そのうえ てい しゅ われら あわれ たま
吻して、 爾 の 上 に釘せられし神を讃 榮して曰う、其 上に釘せられし主よ、我等を 憐 み給え、

なんぢ じんじ ひと あい しゅ
爾 は仁慈にして人を愛する主なればなり。

司祭) ^{えいち} 睿智、

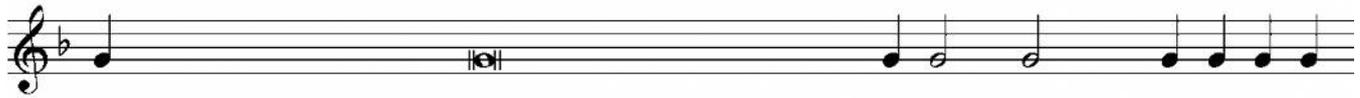


つねにさいわいにして まったくきずなきしよ うし んぢよ
常 福 全 瑕 生 神 女

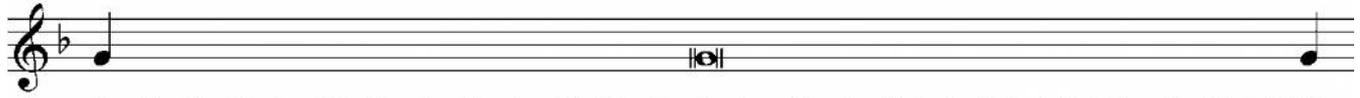


わが かみのははなる なんぢをさんびするはま ことにあたれ り。
吾 神 母 爾 讚美 眞 當

司祭) ^{しせい} 至聖なる ^{しょうしんぢよ} 生神女よ、^{われら} 我等を ^{すく} 救い給え、^{たま}



ヘルヴィムより と う と く セ ラ フィムにならびなくさか え、みさおを
尊 並 榮 え、み 貞 操

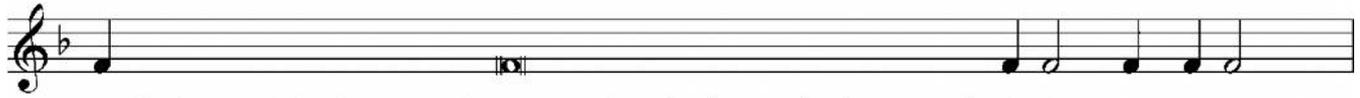


やぶらずしてかみことばをうみしじつ のしょうしんぢよたる なんぢを
壊 神 言 生 實 生 神 女 爾



あがめ ほ む。
崇 讚

司祭) ^{かみわれら} ハリストス神我等の ^{たのみ} 侍よ、^{こうえい} 光榮は ^{なんぢ} 爾に ^き 歸す、^{こうえい} 光榮は ^{なんぢ} 爾に ^き 歸す、



こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよ に、アミン。
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世

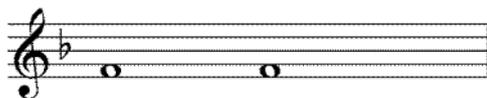


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ、ふくをくだせ。
主 憐 主 憐 主 憐 福 降

司祭) ^{われら} ハリストス我等の ^{まこと} 眞の神は、^{かみ} 其至 ^{そのしじょう} 淨なる母の ^{はは} 祈禱と、^{いのり} 生命を ^{いのち} 施す ^{ほどこ} 尊 ^{とうと} ぎ ^{じゅうじか} 十字架の ^{ちから} 力と、

^{こうえい} 光榮にして ^{さんび} 讚美たる ^{せいしと} 聖使徒、(^{せい} 聖にして ^ぎ 義なる ^{かみ} 神の ^{そふぼ} 祖父母イオアキム及び ^{およ}

^{およ} アンナ及び ^{しよせいじん} 諸聖人の ^{きとう} 祈禱に ^よ 因りて ^{われら} 我等を ^{あわれ} 憐 ^{すく} み ^{かれ} 救わん、^{ぜん} 彼は善にして ^{ひと} 人を ^{あい} 愛する ^{しゅ} 主なればなり、



ア ミ ン。

しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ め しゅ あ わ れ
主 憐 わ れ め しゅ あ わ れ

め よ 。

【 晩課 】

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世々に、

ア ミ ン。

誦經) 來れ、我等の王・神に叩拜せん。

來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん。

來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

【 第103聖詠 】

わ た ま しい しゅ ほ あ しゅわ かみ なんぢ いた おおい なんぢ こうえい いげん こうむ
我が 靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光榮と威嚴とを被
なんぢ ひかり ころも ごと き てん まく ごと は みづ うえ なんぢ みや た くも なんぢ
れり。 爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮を建て、雲を爾
くるま な かぜ つばさ い なんぢ かぜ もつ なんぢ ししゃ な ほのお もつ なんぢ えきしや
の車と爲し、風の翼にて行く。爾は風を以て爾の使者と爲し、焰を以て爾の役者と
な なんぢ ち かた もとい た こ よよ うご なんぢ ふち もつ いふく ごと これ
爲す。 爾は地を固き基に建てたり、此れ世々に動かざらん。 爾は淵を以て衣服の如くに之を
おお やま いただき みづた なんぢ おどし よ こ はし なんぢ いかづち こえ よ すみやか
覆えり、山の嶺に水立つ。 爾の恐嚇に依りて此れは奔り、 爾の雷の聲に由りて速に
さ やま のぼ たに くだ なんぢ こ ため さだ ところ いた なんぢさかい た これ こ
去る。 山に升起、澗に降り、 爾の此れが爲に定めし處に至る。 爾界を立てて之を躐え
かえ ち おお なんぢ いづみ たに つかわ やま あいだ みづ なが の もろもろ
ざらしむ、反りて地を覆わざらん。 爾は泉を澗に遣せり、山の間に水は流れ、野の諸
けもの の の うさぎうま そのかわき とど そら とり そのかたわら す えだ あいだ こえ いた
の獣に飲ましむ、野の驢は其渴を止む。空の鳥は其傍に棲み、枝の間より聲を出
なんぢ うえ みや やま うるお ち なんぢ わざ み あた なんぢ くさ けもの ため
す。 爾は上なる宮より山を潤し、地は爾の造工の果にて饜き足れり。 爾は草を獣の爲に
しょう やさい ひと もとめ ため しょう ち しょくもつ いた さけ ひと こころ たのし
生ぜしめ、野菜を人の需の爲に生ぜしめて、地より食物を出さしむ。酒は人の心を樂
あぶら そのおもて うるお パン ひと こころ やしな しゅ き そのう はくこうぼく あ
ませ、膏は其面を澤し、餅は人の心を養う。主の樹、其植えたるリバンの栢香木は饜

た とり そのうえ す つく まつ つる すみか たか やま しか ため いわお うさぎ ため かくれが
き足れり、鳥は其 上に巢を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は 兎 の爲に避所

しゅ つき つく としき さだ ひ そのい ところ し なんぢくらやみ し すなわちよ その
たり。主は月を造りて時を定め、日は其入る 處を知る。爾 暗 を布けば、則 夜あり、其

ときはやし けものみない めぐ しし えもの ため ほ そのしよく かみ こ ひい かれらあつま
時 林 の 獣 皆出で廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其 食 を神に乞う。日出づれば、彼等 集り

おのれ あな ふ ひと そのわざ ため い はたら くれ いた しゅ なんぢ しわざ なん おお
て己の穴に伏す。人は其工作の爲に出で、勞 きて暮に至る。主よ、爾の工業は何ぞ多き、

みなちえ もつ つく ち なんぢ ぞうぶつ み か おおい ひろ うみ かしこ むすう
皆智慧を以て作り、地は 爾 の造物にて満ちたり。夫の大にして廣き海、彼處には無数の

どうぶつ だいしょう いきもの かしこ ふねかよ かしこ か たいぎよ なんぢつく そのうち あそ
動物、大 小の生物あり、彼處には舟 通い、彼處には彼の 大魚あり、爾 造りて其中に遊ば

かれら みななんぢ としき したが しょく あた ま これ あた う なんぢ て ひら
しむ。彼等は皆 爾 が時に 随いて 食 を予うるを待つ。之に予うれば受け、爾の手を開けば

たまもの あ なんぢ かんばせ かく おそ まど そのき と あ し ちり かえ なんぢ
賜に饜かさる、爾の 顔 を隠せば惶れ惑い、其氣を取り上ぐれば死して塵に歸る。爾の

き ほどこ つく なんぢ またち おもて あらた ねがわ こうえい よよ しゅ あ ねがわ
氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす。願くは光榮は世世に主に在らん、願く

しゅ おのれ わざ ため たのし かれち み ちふる やま ふ けむりた われい うち
は主は己の造工の爲に 樂まん。彼地を觀れば、地震い、山に觸るれば、煙 起つ。我生ける中

しゅ うた よ おわ わ かみ うた ねがわ わ うた かれ よろこ われしゅ ため たのし
主に歌い、世を終るまで我が神に歌わん。願くは我が歌は彼に 悦ばれん、我主の爲に 樂

ねがわ ざいにんら ち き ふほう もの そんな わ たましい しゅ ほ あ
まん。願くは罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我が 靈よ、主を讃め揚げよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

かみ こうえい なんぢ き
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

かみ こうえい なんぢ き
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

かみ こうえい なんぢ き
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す。

【 大聯禱 】

われらあんわ しゅ いの
司祭) 我等安和にして主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの
司祭) 上より降る安和と我等が 靈の救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

ぜんせかい あんわ かみ せい しょきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの
司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ ところ もつ ここ きた もの ため しゅ いの} 此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{きょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんだい だい} 教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙台の大

^{しゅきょう さいい そんぴん よ ほさいしよく ことごと きょうしゅう およ しゅうじん} 主教セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の

^{ため しゅ いの} 爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの} 我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こうち お もの ため しゅ いの} 此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの} 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こうかい もの りょうこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ かれら} 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の

^{すくい ため しゅ いの} 救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの} 我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人

を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハ

リストス神に委託せん、



しゅ な ん ち に 。
主 爾

司祭) (黙誦： 洪恩にして慈憐、寛忍にして至仁なる主よ、我等の禱を聴き、我等が願の聲を

納れ、恩の徴を我等に顯し、我等を爾の途に導きて、爾の眞理に行かしめ給え、我

等の心を樂ましめて、爾の聖なる名を畏るるを致させ給え、蓋爾は大にして奇蹟を

行う者なり、爾は獨神なり、主よ、諸神の中爾に如く者なし、爾は慈憐にして

有力、勇毅にして至善なり、凡そ爾の聖なる名を恃む者を助け、之を慰め之を救う

を致す、)

蓋、凡そ光栄・尊貴・伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



ア ミ ン。

【 第18カフィズマ 】

【 第119聖詠 】

誦經) 我我が憂の中に主を呼びしに、彼我に聴き給えり。主よ、我が靈を詭詐の口、欺騙の

舌より免れしめ給え。欺騙の舌は何を以て爾に予え、何を以て爾に加えんか、勇者の

鋭き箭なり、金雀枝の藪炭なり。哀い哉、我モソフに寓り、キダルの幕の旁に住む。我が

たましい わばく にく もの とも ひさ す われわ この しか われことば いた かれらたたかい
靈 は和睦を疾む者と偕に久しく住めり。我和を好む、然れども我 言 を出せば、彼等 戦
おこ
を興す。

【 第120聖詠 】

われめ あ やま のぞ わ たすけ かしこ きた わ たすけ てんち つく しゅ きた かれ
我目を擧げて山を望む、我が 助 は彼處より來らん。我が 助 は天地を造りし主より來る。彼
なんぢ あし つまづ ゆる なんぢ まも もの ねむ なんぢ まも もの ねむ
は 爾 の足に 躓 くを許さざらん、 爾 を守る者は眠らざらん。イスライリを守る者は眠らず、
い しゅ なんぢ まも もの しゅ なんぢ みぎ て おおい ひる ひ なんぢ いた よる
寝ねず。主は 爾 を守る者なり、主は 爾 の右の手の庇廕なり。晝に日は 爾 を傷めざらん、夜
つき またしか しゅ なんぢ もろもろ わざわい まも しゅ なんぢ しゅつにゆう まも よよ いた
に月も亦然り。主は 爾 を 諸 の 禍 より守らん、主は 爾 の 出 入 を守りて世世に至ら
ん。

【 第121聖詠 】

ひとわれ むか われらしゅ いえ ゆ い とき われよるこ われら あし なんぢ
人 我に向いて、我等主の家に往かんと云う時、我 喜 べり。イエルサリムよ、我等の足は 爾
もん うち た ちゅうみつ まち ごと きづ しよしはすなわしゅ しは
の門の内に立てり。イエルサリムは稠 密 の城邑の如くに築かれ、諸支派 即 主の支派がイスラ
ほう したが のぼ しゅ な さんえい ところ かしこ しんばん ほうぎ いえ
イリの法に 遵 いて、上りて主の名を讚 榮する 處 なり。彼處に審 判の寶座、ダヴィドの家の
ほうぎ た ため へいあん もと ねが なんぢ あい もの あんねい え ねが
寶座は立つ。イエルサリムの爲に平 安を求めよ、願わくは 爾 を愛する者は安 寧を得ん。願わ
なんぢ しろ うち へいあん なんぢ みや うち あんねい われ わ けいてい わ となり ため い
くは 爾 の城の中は平 安、爾 の宮の中は安 寧ならん。我は我が兄 弟、我が 隣 の爲に云う、
なんぢへいあん しゅわ かみ いえ ため われなんぢ ふく ねが
爾 平 安なれ。主我が神の家の爲に我 爾 に福を願う。

【 第122聖詠 】

てん お もの われめ あ なんぢ のぞ み ぼく めしゅじん て のぞ ひ めしゅふ て のぞ
天に居る者よ、我目を擧げて 爾 を望む。視よ、僕 の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望
ごと われら め しゅわ かみ のぞ そのわれら あわれ ま しゅ われら あわれ われら
むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を 憐 むを俟つ。主よ、我等を 憐 み、我等
あわれ たま けだしわれら あなどり あ た われら たましい おご もの はづかしめ ほこ もの
を 憐 み給え、蓋 我等は 悔 に鑿き足れり。我等の 靈 は驕る者の 辱 と誇る者の
あなどり あ た
悔 とに鑿き足れり。

【 第123聖詠 】

イスライリ云うべし、若し主 我等と偕にあらず、人 人起ちて我等を攻めし時、若し我等と偕に
かれら われら お いかり も くれら われら い の みづ
あらざりしならば、彼等が我等に於ける 怒 は燃えて、彼等は我等を生きながら呑みしならん、水は
われら しづ ながれ われら たましい うえ す あ みづ われら たましい うえ す われ
我等を沈め、流 は我等の 靈 の上を過ぎ、暴れたる水は我等の 靈 の上を過ぎしならん。我

ら あた そのほ えもの しゅ あが ほ われら たましい のが とり とら
等を昇えて其齒の獲物となさざりし主は崇め讃めらる。我等の靈は脱れしこと、鳥が捕うる

もの あみ のが ごと あみさ われらのが われら たすけ てんち つく しゅ な あ
者の羅を脱るるが如し、羅裂かれて我等脱れたり。我等の扶助は天地を造りし主の名に在り。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ光榮は爾に歸す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ光榮は爾に歸す、

ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、ア ril イ ヤ、神よ光榮は爾に歸す、

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの
我等復又安和にして主に禱らん、



司祭) かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ しょせいじん
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人

きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ
を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハ

リストス 神に委託せん、



司祭) (黙誦: しゅ なんぢ いきどおり もつ われら せ なか なんぢ いかり もつ われら ぼつ なか
主よ、爾の愼を以て我等を責むる勿れ、爾の怒を以て我等を罰する勿れ、

われら たましい いし ちりやうしゃ なんぢ あわれみ よ われら おこな たま われら みちび なんぢ
我等の靈の醫師と治療者よ、爾の憐に依りて我等に行い給え、我等を導きて爾

むね みなと いた われら こころ め あきら なんぢ しんり し ならび われら こ
が旨の埠に至らしめ、我等が心の眼を明かにして爾の眞理を識らしめ、並に我等に此

ひ おわり われら しょうがい へいあんむざい わた たま せい しょうしんぢよ しょせいじん
の日の終と我等の生涯とを平安無罪にして度らしめ給え、聖なる生神女と諸聖人の

きとう よ
祈禱に依りてなり、)

けだしけんべいおよ くに けんおう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



アミ ン。

【 第124聖詠 】

誦經) 主を頼む者はシオン山の如く動かずして永く存す。諸山はイエルサリムを環り、主は其民を環りて今より世世に返らん。蓋主は悪者の杖に、義者の業の上にあるを許さざらん、義者其手を不法に伸べざらん爲なり。主よ、恩を善人と心の直き者とに施し給え、己の曲徑に轉ずる者に至りては、願わくは主は彼等に不法を行ふ者と偕に行くを許さん。願わくは平安はイズライリに歸せん。

【 第125聖詠 】

主がシオンの擣を返しし時、我等夢見るが如くなりき、其時我等の口は樂にて盈ち、我等の舌は歌に満ちたり、其時諸民の中に云えるありき、主は彼等に大なる事を行えりと。主は我等に大なる事を行えり、我等喜べり。主よ、我等の擣を南方の流の如くに返し給え。涙を以て播く者は、喜を以て穫らん。泣きて種を擣うる者は歡びて其禾束を擣えて歸らん。

【 第126聖詠 】

若し主家を造らざれば、造る者徒に勞し、若し主城を守らざれば、守る者徒に儆醒す。爾等徒に夙に興き、遅く寝ね、憂の餅を食う、時に彼は其愛する者に寝ぬるを賜う。視よ、主が與うる所の業は諸子なり、其褒賞は腹の果なり。少壯の諸子は、勇者の手にある箭の如し。此を其箛に充てたる者は福なり、彼等門の内に在りて敵と共に言う時、羞を得ざらん。

【 第127聖詠 】

凡そ主を畏れて、其途を行く者は福なり。爾は己が手の勞に依りて食わん、爾は福なり、爾は善を得たり。爾の妻は爾の家内に在りて、實繁き葡萄の樹の如く、爾の諸子は爾の席を環りて、橄欖の枝の如し、主を畏るる者は此くの如く降福せられん。主はシオ

なんぢ こうふく なんぢざいせい しょじつ あんねい み なんぢ おのれ こ こ み
ンより 爾に降福せん、爾在世の諸日イエルサリムの安寧を視ん、爾は己が子の子を見ん。

ねが へいあん き
願わくは平安はイスライリに歸せん。

【 第128聖詠 】

イズライリ云うべし、我が 幼き時より彼等多く我を攻め、我が 幼き時より多く我を攻め
たれども、我に勝たざりき。耕す者は我が背に 耕し、其 畷を長くせり。然れども主は義なり、
かれは悪者の縛を断てり。願わくはシオンを疾む者は皆 羞を被りて 退けられん。願わくは
彼等は屋の上の草、抜かれざる先に枯るる者の如くならん、刈る者は之を以て其手に盈てず、束
ぬる者は其 握に盈てざらん、過ぐる者は、主の降福は 爾等に歸すべし、我等主の名を以て
爾等を祝 福すと云わざらん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光榮は 爾に歸す、

【 小聯禱 】

われらまたまたあんわ しゅ いの
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ しょせいじん
司祭) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人
を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハ
リストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。
主 爾 ぢ に 。

司祭) (黙誦：主我が神よ、我等が爾の聖にして拜まるる名を籲ぶ時、我等爾の罪なる不當の

ぼく きおく われらなんぢ じれん たの もの はづかし なか しゅ すなわちわれら およ もと
僕を記憶して、我等爾の慈憐を恃む者を辱むる勿れ、主よ、乃我等に凡そ求むる

ところ すくい ため せつよう もの たま ならび われら ころ つく なんぢ あい なんぢ おそ
所、救の爲に切要なる者を賜い、並に我等に、心を盡して爾を愛し、爾を畏れ、

およ ばんじ おい なんぢ むね おこな え たま
及び萬事に於て爾の旨を行うを得せしめ給え、)

けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いっ
蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も

よよ
世世に、



ア ミ ン。

【 第129聖詠 】

誦經) 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、願わくは爾の耳は我が禱の

こえ き い しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし
聲を聴き納れん。主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あ

ひと なんぢ まえ つつし ため われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの
り、人の爾の前に敬まん爲なり。我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ ねが
我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。願わくはイスライリ

しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ そのことごと
は主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイスライリを其悉く

ふほう あがな
の不法より贖わん。

【 第130聖詠 】

しゅ わ ころおご わ めたか われおおい わ およ あた こと い われ
主よ、我が心驕らず、我が目高ぶらず、我大にして我が及ぶ能わざる事に入らざりき。我

あ わ たましい しづ これ やす はは ちち た こ ごと わ たましいわれ
豈に我が靈を鎮め、之を安んずること、母の乳を斷ちし兒の如くせざりしか、我が靈我の

うち おい ちち た こ ごと ねが しゅ たの いま よよ いた
衰に於て乳を斷ちし兒の如くなりき。願わくはイスライリは主を恃みて今より世々に迄らん。

【 第131聖詠 】

しゅ そのことごと うれい きおく かれしゅ ちか ゆうのうしや やく い
主よ、ダヴィドと其悉くの憂とを記憶せよ。彼主に誓い、イアコフの有能者に約して云

われわ いえ まく い わ とこ のぼ らず わ めい わ まぶた ねむ ゆ しゅ
えり、我我が家の幕に入らず、我が榻に登らず、我が目に寝ね、我が瞼に眠るを容るさずして、主

ため ところ え ゆうのうしや ため すまい う およ み われらこれ
 の爲に處所を得、イアコフの有能者の爲に住所を得るに及ばんと。視よ、我等之をエフラサに聞
 き、之にイアリムの田に遇えり、往きて彼の住所に就き、彼の足凳に叩拜せん。主よ、爾及び
 なんぢ のうりよく ひつ なんぢ あんそく ところ た なんぢ しさいら ぎ き なんぢ しょせいじゃ よろこ
 爾が能力の匱は爾が安息の所に立てよ。爾の司祭等は義を衣、爾の諸聖者は悦ば
 なんぢ ぼく ため なんぢ あぶら もの おもて てん なか しゅ しんじつ もつ
 ん。爾の僕ダヴィドの爲に、爾が膏つけられし者の面を轉ずる毋れ。主は眞實を以て
 ちか これ そむ いわ われなんぢ はら み もつ なんぢ ほうぎ ざ も
 ダヴィドに誓いて、之に背かざらん、曰く我爾が腹の果を以て爾の寶座に坐せしめん。若し
 なんぢ しょしわ やく わ かれら おし けいし まも かれら しょし またなが なんぢ ほうぎ
 爾の諸子我が約と、我が彼等に誨えんとする啓示とを守らば、彼等の諸子も亦永く爾の寶座
 ざ けだししゅ えら これ もつ そのすまい のぞ いわ こ わ よよ あんきよ
 に坐せん。蓋主はシオンを擇び、此を以て其住所とするを望めり、曰く、此れ我が世の安居
 われここ お けだしわれこれ のぞ われそのかて しゆくふく しゆくふく パン もつ そのまづ
 なり、我此に居らん、蓋我之を望めり。我其糧を祝福し祝福せん、餅を以て其貧し
 もの あ われすくい もつ そのしさいら き そのしょせいじゃ よろこ よろこ われかしこ おい
 き者を饜かしめん。我救を以て其司祭等に衣せん、其諸聖者は喜び悦ばん。我彼處に於
 つの ちょう わ あぶら もの ため ともしび た われそのてき はぢ き
 てダヴィドに角を長ぜしめ、我が膏つけられし者の爲に燈を立てん。我其敵に恥を衣せ
 そのかんむり その うえ かがや
 ん、其冕は其の上に耀かん。

【 第132聖詠 】

けいていむつま お ぜん かな び かな こ たから あぶら こうべ ひげすなわち
 兄弟睦しく居るは、善なる哉、美なる哉。是れ寶なる膏が首にありて、髯即アア
 ひげ なが そのころも すそ なが ごと つゆ ざん くだ ごと けだしかしこ
 ロンの髯に流れ、其衣の裾に流るるが如く、エルモンの露のシオン山に降るが如し。蓋彼處
 おい しゅ こうふく えいせい めい
 に於て主は降福と永生とを命じたり。

【 第133聖詠 】

しゅ しょぼく やちゆうしゅ いえ わ かみ いえ にわ た もの いましゅ あが ほ なんぢ て あ
 主の諸僕、夜中主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、今主を崇め讃めよ。爾の手を挙げ、
 せいしよ むか しゅ あが ほ てんち つく しゅ なんぢ こうふく
 聖所に向いて主を崇め讃めよ。天地を造りし主はシオンより爾に降福せん。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

かみ こうえい なんぢ き
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す、

かみ こうえい なんぢ き
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す、

かみ こうえい なんぢ き
 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ光榮は爾に歸す、

【 小聯禱 】

われらまたまたあんわ しゅ いの
 司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ しょせいじん} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、諸聖人

^{きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ} を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハ

^{かみ いたく} リストス神に委託せん、



しゅ な んぢ に 。
主 爾

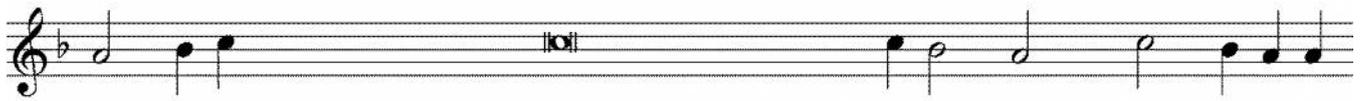
司祭) ^{けだしなんぢ われら かみ あわれみ すくい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま} 蓋爾は我等の神、慈憐と拯救との神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も

^{いつ よよ} 何時も世に、

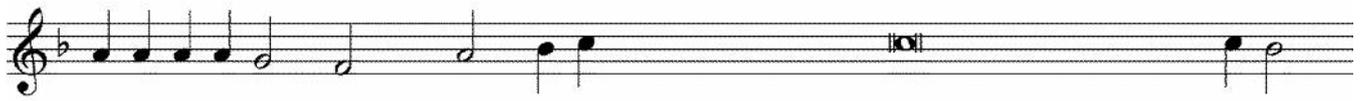


アミン。

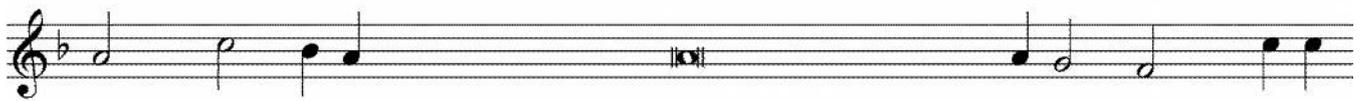
【 第140聖詠 第7調 】



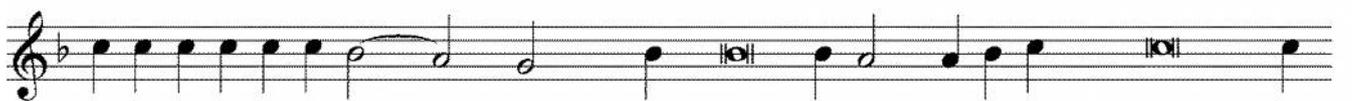
しゅ よ なんぢによぶすみやかにわれにいたりたまえ、しゅよわれ
主 爾 呼 速 我 格 給 え、主 我



にききたまえ、しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりたま
給 聽 給 え、主 爾 呼 速 我 格 給



え、なんぢによぶときわがいのりのこえをいれたまえ、しゅよ
爾 呼 時 我 禱 聲 納 給 え、主



われにききたまえ、ねがわくはわがいのりはこうろの
我 給 聽 給 え、願 我 禱 香 爐



誦經) しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ ころよこしま ことば かたぶ
 主よ、我が口に 衛を置き、我が 唇の門を扞ぎ給え、我が心に 邪なる言に傾きて、
 ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら あまみ な ぎじん
 不法を行う人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗めざらん。義人は
 われ ばつ こ きょうじゅつ われ せ こ い うるわ あぶら わ こうべ なや あた
 我を罰すべし、是れ 矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と 美しき膏、我が首を悩ます能わ
 もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら しゅちよう いわお あいだ さん わ ことば
 ざる者なり、唯我が 禱は彼等の悪事に敵す。彼等の 首長は巖石の間に散じ、我が言の
 にゅうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ぢごく くち ち お しゅ しゅ ただ
 柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り砕き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯
 わ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ
 我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が 靈を退くる母れ。我が爲に設けられし 罫、不法者
 あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え
 の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第 141 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれしい そのまえ
 我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が 禱を其前に注ぎ、我が 憂を其前に
 あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい かれら ひそか
 顯せり。我が 靈の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、彼等は 竊
 わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ のが ところ
 に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる 所なく、
 わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ かくれが い もの ち
 我が 靈を顧る者なし。主よ、我 爾に呼びて云えり、爾は我の避所なり、生ける者の地
 おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ われ はくがい もの すく
 に於いて我の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我 甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い
 たま かれら われ つよ わ たましい ひとや ひ いだ われ なんぢ な さんえい
 給え、彼等は我より強ければなり。我が 靈を獄より引き出して、我に 爾の名を讚榮せし
 たま なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ
 め給え。 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ まえ
 ⑥主よ、若し 爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども 爾に 赦あり、人の 爾の前
 つつし ため
 に 敬まん爲なり。

ハリストスよ、^{われ わ たましい たつと しょよく ふく かちく ごと め あ}我は吾が靈の尊きを諸愆に服せしめて、家畜の如くになれり。目を擧げて
^{なんぢしじょうしゃ あお え しも ふ ぜいり ごと いの なんぢ よ かみ われ きよ われ}爾至上者を仰ぐを得ずして、下に俯し、税吏の如く祈りて爾に呼ぶ、神よ、我を潔め我
^{すく たま}を救い給え。

^{われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの}
⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

ハリストスよ、^{われ わ たましい たつと しょよく ふく かちく ごと め あ}我は吾が靈の尊きを諸愆に服せしめて、家畜の如くになれり。目を擧げて
^{なんぢしじょうしゃ あお え しも ふ ぜいり ごと いの なんぢ よ かみ われ きよ われ}爾至上者を仰ぐを得ずして、下に俯し、税吏の如く祈りて爾に呼ぶ、神よ、我を潔め我
^{すく たま}を救い給え。

^{わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ}
④我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

^{ちめいしゃ むしん くらやみ お しゅうじん しんち ひかり しめ たま}
致命者は無神の幽暗を逐いて、衆人に神智の光を示し給えり。

^{ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ}
③願わくはイスライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイ
^{そのことごと ふほう あがな}ズライリを其悉くの不法より贖わん。

^{きゅうせいしゅ ぜんせかい しんぼん ため きた とき われは わざ おこな もの はづ なか}
救世主よ、全世界を審判せん爲に来る時、我恥づべき行爲を行いし者を辱かしむる勿
れ。

^{ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ}
②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

^{かみ こうえい なんぢ き なんぢ しと ほまれ ちめいしゃ よろこび かれら おしえ}
ハリストス神よ、光榮は爾に歸す、爾は使徒の譽、致命者の悦なり。彼等の教は
^{いつたい さんしゃ}一體の三者なり。

^{けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが せん}
①蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

^{せい ちめいしゃ よ なん う えいかん こうむ もの われら たましい すく しゅ いの}
聖なる致命者、善く難を受けて榮冠を冠りし者よ、我等の靈の救われんことを主に祈
^{たま}り給え。

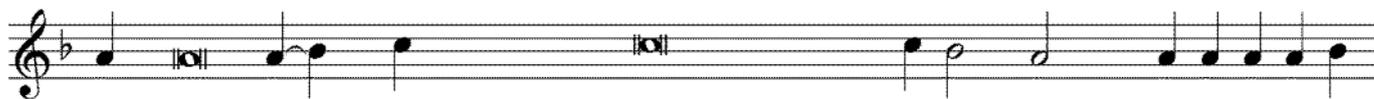
^{こうえい ちち こ せいしん き}
光榮は父と子と聖神に歸す、

^{わ きゅうせいしゅ いのち ほどこ しゅ なんぢ ざんじ いのち うつ われら けいてい やすん たま}
我が救世主、生を施す主よ、爾が暫時の生命より移しし我等の兄弟を安ぜしめ給
^{けだしかれら よ しゅ こうえい なんぢ き}え、蓋彼等呼ぶ、主よ、光榮は爾に歸す。

【 生神女讃詞 第7調 】



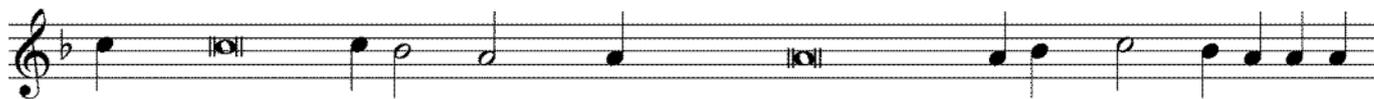
いまもいつもよよに、アミン。
今 何時 世世



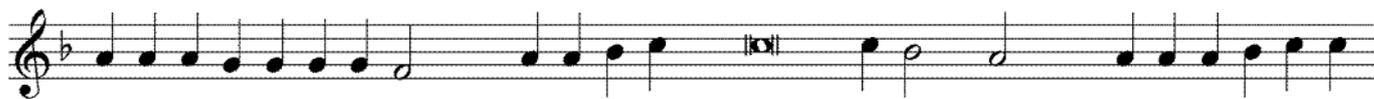
しょうしんがよよお、なんぢはせいにごえてははとしられ、ことばとち
生 神女 爾 性 超 母 識 言 智



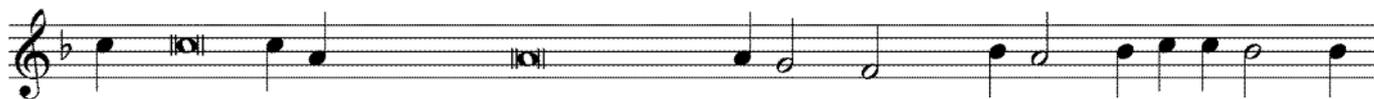
しきとにごえてどうていぢよにとどまれり、したはなんぢのさんのき
識 躰 童 貞 女 止 舌 爾 産 奇



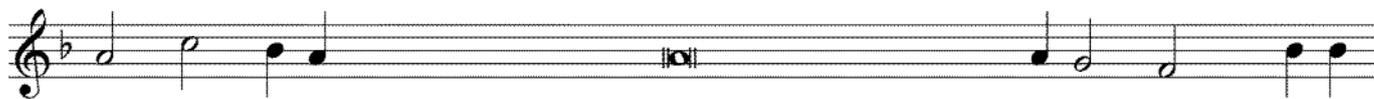
せきをいうあたわす。けだしいさぎよきものよ、なんぢのはら
跡 言 能 ず 蓋 潔 ぎ 者 降 孕



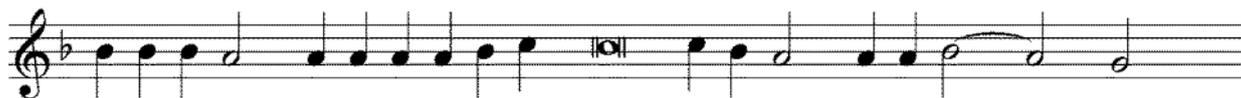
みはしえいにして、さんのさまはさとりがたし、かみのほつする
至 榮 産 状 悟 難 神 欲



ところにはてんせいのほうかたるればなり。ゆえにわれらみ
所 天 性 法 勝 故 我 等 皆



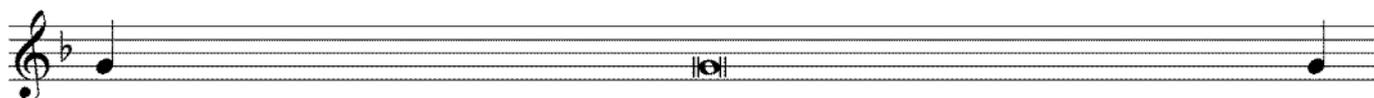
ななんぢをかみのははとしりて、せつになんぢにもとむ、われ
爾 神 母 識 爾 求 我



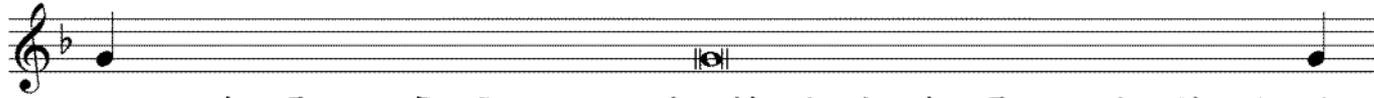
らのたましいのすくわれんことをいのりたまあえ。
等 靈 救 禱 給 え

司祭) 睿^{えい}智、^{つつし}肅^たみて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】



せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの
聖 福 常 生 天 父



せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ
聖 光 榮 穩 光

ススハリスト スよ、われらひのいりにいたりく
 我等日入至暮
 れのひかりをみて、かみちちとことせいしん
 光 見 神 父 子 聖 神
 をうと おう。いのちをたもうかみのこ
 歌 生 命 賜 神 子
 よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ
 爾 何時 敬 虔 聲 歌
 るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ
 故 世 界 爾 崇
 ほむ。

【 提綱 第79聖詠 第4調 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、^{えいち} 睿智、^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし。

誦經) ^{プロキメン} 提綱、^{だいし} 第四の調、^{しらべ} イズライリの牧者よ、^{ぼくしゃ} 耳を傾 ^{みみ} けよ。^{かたぶ}

イズラ イリの ^{ぼくしゃ} 牧者 ^よ、^{みみ} 耳を ^{かたぶ} 傾 ^け け ^よ。

誦經) ^{ひつじ} イオシフを ^{ごと} 羊の如く ^{みちび} 導く者、^{もの} ヘルヴィムに ^ざ 坐する者よ、^{もの} 己を ^{おのれ} 顯 ^{あらわ} せ。

イズラ イリの ^{ぼくしゃ} 牧者 ^よ、^{みみ} 耳を ^{かたぶ} 傾 ^け け ^よ。

誦經) ^{ぼくしゃ} イズライリの牧者よ、

^{みみ} 耳 ^{かたぶ} を ^傾 け ^け け ^よ。

【 創世記 第12章 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{そうせいき よみ} 創世記の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{しゅ い なんぢ ち なんぢ しんぞく なんぢ ちち いえ い わ なんぢ} 主はアヴラムに謂えり、爾の地より、爾の親族より、爾の父の家より出でて、我が爾に

^{しめ ち ゆ われなんぢ おおい たみ いた なんぢ しゆく なんぢ な おおい なんぢ} 示さんとする地に往け、我爾より大なる民を出し、爾を祝し、爾の名を大にせん、爾は

^{しゆくふく もとい な われ なんぢ しゆく もの しゆく なんぢ のろ もの のろ なんぢ よ ち} 祝福の基と爲らん、我は爾を祝する者を祝し、爾を詛う者を詛わん、爾に因りて地の

^{ばんぞく しゆくふく え しゅ かれ い ところ したが い かれ とも ゆ} 萬族は祝福を獲ん。アヴラムは主の彼に言いし所に從いて出でたり、ロトも彼と偕に行けり。

^{ち い とくしちじゅうごさい そのつま そのあに こ およ その} アヴラムはハルランの地を出でし時七十五歳なりき。アヴラムは其妻サラ、其兄の子ロト、及び其

^{あつ すべ もちもの え ひとびと たづさ い ち ゆ} 集めたる總ての所有と、ハルランにて獲たる人衆とを攜えて、出でて、カナアンの地に往けり。アヴ

^{そのち たて へ ところ およ たか かし き いた そのとき ひとそのち す} ラムは其地を縦に經て、シケムの處に及び、高き橡の樹に至れり、其時カナアンの人其地に住め

^{しゅ あらわ い われこ ち なんぢ すえ あた かしこ おい かれ あらわ} り。主はアヴラムに現れて曰えり、我斯の地を爾の裔に予えん。アヴラムは彼處に於て、彼に現

^{しゅ ため さいだん きづ} れし主の爲に祭壇を築けり。

【 ^{プロキメン} 提綱 第80聖詠 第4調 】

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{プロキメン だいし しらべ よろこ かみ われら かため うた} 提綱、第四の調、歡びて神、我等の防固に歌え。

よろこびてかみ、われらのかためにうたえ。
歡 神 我 等 防 固 歌

誦經) ^{うた と つづみ かきん しつ あた} 歌を執り、鼓と佳琴と瑟とを與えよ。

よろこびてかみ、われらのかためにうたえ。
歡 神 我 等 防 固 歌

誦經) ^{よろこ かみ} 歡びて神、



われらのかためにうたえ。
我等防固歌

司祭) 睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

【 箴言 第14章 】

誦經) 箴言の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 拙き者は凡の言を信じ、達き者は己の途を慎む。智者は懼れて惡を離れ、患者は己を恃みて不法者と交る。怒り易き者は愚なることを行うを得、惟謀りて惡を行ふ人は惡まる。拙き者は無知を嗣業と爲し、達き者は知識を冕と爲す。惡者は善人の前に俯伏し、罪者は義人の門に俯伏せん。貧しき者は其隣にも惡まる、富める者には親友多し。其隣を藐る者は罪あり、貧しき者を憐む人は福なり。惡を謀る者は迷えるに非ずや、惡を行ふものは慈憐と眞實とを知らず、唯善を謀る者には慈憐と眞實あり。凡の勞には益あり、唯多言には損あるのみ。智者の富は其冕なり、患者の度生は禍なり。正しき證者は人の生命を救い、正しからざる者は謊を吐く。主を畏るる寅畏には堅き依頼あり、彼は其諸子の爲に避所なり。

司祭) 爾に平安、睿智、願わくは我が禱は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、我が手を

擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。



ねがわくはわがいのりはおおろのかおりのごとく
願我禱香爐香如



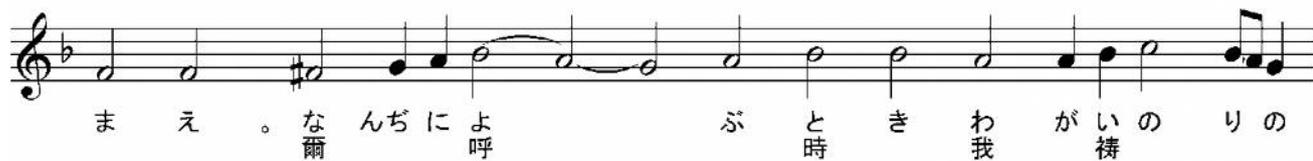
なんぢがかんばせのまえにのぼり、
爾んぢが顔せの前えに登り、



わが手をあ擧ぐるは暮のまつりのごとく納れられん。
我手あ擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。



しゅよ なんちによ ぶ、すみやかにわれにいたりた給
主 爾 ちによ 呼 ぶ、速 やかに我 れに至 たりた給



まえ。なんちによ ぶときわがいのりの
え。 爾 ちによ 呼 ぶ 時 き わ が い の り の



こえをいれたまえ。
聲 えを納 りた給 ま え。



ねがわくはわがいのりはこおろのかおりのごとく
願 が わ く は わ が い の り は こ お ろ の か お り の ご と く



なんちがかんばせのまえにのぼり、
爾 ちが 顔 せのま 前 えにの 登 ぼり、



わがてをあげるはくれのまつりのごとくいれられん。
我 が て を あ げ る は く れ の ま つ り の ご と く い れ ら れ ん。



しゅよわがくちにまもりをおき、わがくちびる
主 よ わ が く ち に ま も り を お き 、 わ が く ち び る



のもんをふせぎたまえ。
の も ん を ふ せ ぎ た ま え。



ねがわくはわがいのりはこおろのかおりのごとく
願 が わ く は わ が い の り は こ お ろ の か お り の ご と く



なんちがかんばせのまえにのぼり、
爾 ちが 顔 せのま 前 えにの 登 ぼり、



わがてをあげるはくれのまつりのごとくいれられん。
我 が て を あ げ る は く れ の ま つ り の ご と く い れ ら れ ん。

わ が こころ に よこしまなることば にかたぶきて、
我 心 邪 言 傾

ふ ほ うを お この うひ と ととも に、 つ みの
不 法 行 の 人 と 共 に、 罪 の

い い わ け せ し む る な か れ。
推 諉 母 れ。

ね が わ く は わ が い の り は こ お ろ の か お り の ご と く
願 わ く は わ が 祈 り は 香 爐 の 香 の 如 く

な ん ぢ が か ん ば せ の ま え に の 登 ぼ り、
爾 ぢ が 顔 の 前 え に の 登 ぼ り、

わ が て を あ ぐ る は く れ の ま つ り の ご と く い れ ら れ ん。
我 手 を あ 擧 ぐる は 暮 祭 の 如 く 納 ら れ ん。

司祭) ^{ねが わ いのり こうろ かおり ごと なんぢ かんばせ まえ のぼ}願わくは我が 禱は香爐の 香の如く爾が 顔の前に登り、

わ が て を あ ぐ る は く れ の ま つ り の ご と く い れ ら れ ん。
我 手 を あ 擧 ぐる は 暮 祭 の 如 く 納 ら れ ん。

【 聖エフレムの祝文 】

司祭) ^{しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと こころ われ あた なか みさお へりくだり}主、我が生命の主 宰よ、怠惰と愁悶と陵駕と空談の 情を我に與うる勿れ、貞操と謙遜

^{こらえ あい こころ われなんぢ ぼく あた たま ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ}と忍耐と愛の 情を我 爾の僕に與え給え、嗚呼、主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せ

^{たま けだしなんぢ よよ あが ほ}ざるを賜え、蓋 爾は世に崇め讃めらる、アミン。

【 先備聖體禮儀 】

【 重聯禱 】

司祭) ^{われらみなたましい まつと い われら おもい まつと い}我等皆 靈を全うして曰わん、我等の思を全うして曰わん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{しゅ ぜんのうしゃ わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ} 主、全能者、吾が列祖の神よ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ} 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわがくに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの} 又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき せんたい だいしゅきょう} 又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教ダニイル、尊貴なる仙台の大主教セ

^{およ}ラフィム、及びハリストスに於ける ^{お ことごと われら けいてい ため いの} 悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわれら けいてい しょしさい しょしゅうどうしさい およ お われら しゅうけいてい ため いの} 又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またつね きおく ふく しせい せいきょう バトリアルフ けいけん しょおう けいけん しょう こう こ} 又恒に記憶せらるる福たる至聖なる正教の総主教、敬虔の諸王、敬虔の諸后、此の

^{せいどう こんりゅうしゃ およ すで ねむ ことごと ふそけいてい こ ところ しょうほう ほうむ} 聖堂の建立者、及び既に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる

^{せいきょう もの ため いの} 正教の者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこの至尊なる聖堂に物を献り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ち

て爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに因りて我

等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ爾の民に遣し給え、)

蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も

よよ
世に、



アミン。

【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、



しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) 義の福音經を彼等に啓かん、



しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも} 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、



司祭) ^{けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが} 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) (黙誦: ^{かみわ かみ ばんぶつ ぞうせいしゃ しゅうじん すくい え しんり し いた ほつ しゅ} 神我が神、萬物の造成者、衆人の救を獲て眞理を知るに至らんことを欲する主

^{なんぢ ぼくけいもうしゃ かえり かれら きゅうじ まよい きゅうてき あくぼう まぬが かれら} よ、爾の僕啓蒙者を顧み、彼等を舊時の迷と仇敵の悪謀より免れしめ、彼等を

^{えいせい め そのれいたい てら かれら なんぢ せいな こうむ れいち なんぢ ようぐん あわ たま} 永生に召して其靈體を照し、彼等を爾の聖名を蒙る靈智なる爾の羊群に合せ給え、)

^{ねがわ かれら われら とも なんぢち こ せいしん しそんしえい な さんよう いま いつ よよ} 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何時も世世に、



【 光照者の爲の聯禱 】

司祭) ^{しゅうけいもうしゃい けいもうしゃい およ こうしょう そな ものい きた こうしょう そな もの} 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、凡そ光照に備うる者出で來れ、光照に備うる者

^{いの} 禱るべし、



司祭) ^{しんじゃ せい こうしょう そな けいてい およ かれら すくい ため しゅ いの} 信者よ、聖なる光照に備うる兄弟、及び彼等の救の爲に主に禱らん、



司祭) ^{ねがわ しゅわ かみ かれら けんご けんりつ} 願くは主我が神は、彼等を堅固にし健全せん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{ちえ けいけん こうしょう もつ かれら てら} 智慧と敬虔との光照を以て彼等を照さん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{よる とき おい かれら ふくせい よくぼん しょざい ゆるし ふきゆう ころも たま} 宜しき時に於て、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不朽の衣を賜わん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{みづ せいしん もつ かれら う} 水と聖神を以て彼等を生まん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かれら しん まつた たま} 彼等に信の全きを賜わん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かれら そのえら せい むれ あわ} 彼等を其選びたる聖なる群に合せん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも} 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{こうしょう そな もの なんぢら こうべ しゅ かが} 光照に備うる者よ、爾等の首を主に屈めよ、



しゅ な んぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦: ^{しゅさい せい こうしょう そな つみ けがれ す ほつ もの なんぢ かんばせ あらわ} 主宰よ、聖なる光照に備えて罪の汚を棄てんと欲する者に爾の顔を現し、

かれら おもい てら かれら しん あつ のぞみ かと あい まつと おのれ す わ たましい
彼等の念を照し、彼等を信に篤うし、望に固うし、愛に完うし、己を捨てて我が靈の

あがない なんぢ とうと えだ あらわ たま
贖となりし爾がハリストスの尊き肢として顯し給え、)

けだしなんぢ われら こうしょう われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋爾は我等の光照なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



【 信者の聯禱 】

およ こうしょう そな ものい こうしょう そな ものい しゅうけいもうしゃい けいもうしゃひとり
司祭) 凡そ光照に備うる者出でよ、光照に備うる者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人
もなく、唯信者復又安和にして主に禱らん、



しゅうけいもうしゃい けいもうしゃい しゅうけいもうしゃい けいもうしゃひとり ただしんじままた
司祭) 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信者復又
安和にして主に禱らん、



かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) 睿智、

(黙誦: おおい さんび かみ なんぢ いのち ほどこ し もつ われら く く
大にして讚美たる神、爾がハリストスの生命を施す死を以て、我等を朽つるより朽

ちざるに移しし者よ、爾は我等の悉くの官能が慾に殺さるるを免れしめ、内の思念を其

よ、どうしゃ これ そ たま ねがわ め およそ じゃあく み あづか みみ そらごとい
善き導者となして此に添え給え、願くは目は凡の邪惡を視るに與らず、耳には空言入り

がた した ひれい ことば きよ しゅ わ なんぢ さんび くち いさぎよ わ て あ
難く、舌は非禮の言より淨められん、主よ、吾が爾を讚美する口を潔くせよ、我が手に惡

しき 行に遠かりて、唯爾を喜ばしむることを行うを得せしめ、凡そ吾が百體と意思と

なんぢ おんちょう もつ かた たま
を爾の恩寵を以て固め給え、)

けだし およ こうえい そんき ふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
蓋、凡そ光榮・尊貴・伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



われらまたまたあんわ しゅ いの
司祭) 我等復又安和にして主に禱らん、



うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの
司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



ぜんせかい あんわ かみ せい しよきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの
司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



こ せいどう およ しん つつし かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの
司祭) 此の聖堂、及び信と慎みと神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの
司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



えいち
司祭) 睿智、

(黙誦: 聖にして至善なる主宰よ、爾憐の饒なる者に求む、我等罪人を憐みて、爾

の獨生子、我が神、光榮の王を戴くに勝る者となし給え、蓋斯の時此に入る所の彼の

しじょう たい およ いのち ほどこ ち たすう てんぐん み にな たてまつ もの こ おうみつ えん
至 淨 なる 體、及び 生命を 施 す 血、多數の 天 軍の 見え ずして 荷い 奉 る 者は、此の 奥 密の 筵

すす ほつ いの われら つみ え これ あづか たま われら これ よ れいもく
に 進められんと 欲す、祈る 我等に 罪を 獲ずして 之に 與 るを 賜いて、我等が 此に 藉りて 靈 目を

てら ひかりおよ ひる こ いた たま
照 され、 光 及び 晝の子となるを 致 させ 給え、)

なんぢ おんしよ なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん とも あが
爾 が 伊 刺 斯 脱 斯 の 恩 賜 に 依 り て な り、 爾 は 彼 と 至 聖 至 善 に して 生 命 を 施 す 爾 の 神 と 偕 に 崇

ほめ讃めらる、いま いつ よよ
め 讃 め ら る、 今 も 何 時 も 世 世 に、

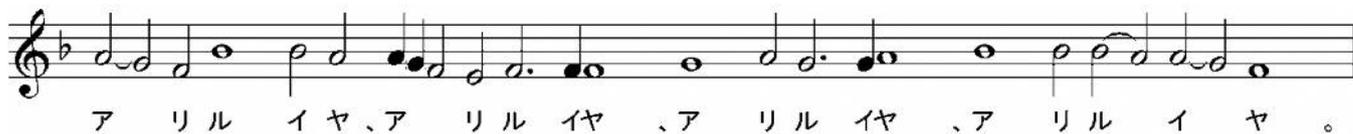


【 大 聖 入 】

い 今 ま て 天 んぐ 軍 ん、 わ れ ら 等 と 借 も に、
み 見 え ず し て つ 奉 と め 事 を な 爲 す。
こ 光 う え 榮 い の お 王 うい り た 給 ま え ば な り。
こ 光 う え 榮 い の お 王 う、 い り た 給 ま え ば な り。
ひ み 密 つ の ま っ た き た 奉 て ま つ り は
こ 之 れ に 荷 な わ る る。

※ 司祭が至聖所に入ってから

し 信 んと あ 愛 いにてちか づげよ、か 限 ぎり な き い 生 の ちをともなわ ん。



ア リル イヤ、ア リル イヤ、ア リル イヤ、ア リル イヤ。

【 聖エフレムの祝文 】

司祭) 主、我が生命の主 宰よ、怠惰と愁悶と陵駕と空談の情を我に與うる勿れ、貞操と謙遜

と忍耐と愛の情を我爾の僕に與え給え、嗚呼、主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せ

ざるを賜え、蓋爾は世に崇め讃めらる、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) 我等主の前に吾が晩の禱を増し加えん、



しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) 已に獻ぜられ及び先に聖にせられし尊き祭品の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) 人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香として享け、

我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、



しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ め よ。
主 憐

司祭) 此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと} 平 安の天使、正しき教 導 師、吾が靈 體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと} 我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと} 我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平 安を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと} 我等の生命の餘日を平 安と痛 悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) ^{われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ} 我等の生命の 終 がハリストティアニンに適い、疾 なく、耻なく、平 安なること、及びハリスト
^{おそ べ しんばん おい よろ こたえ たま もと} スの畏る可き審 判に於て宜しき 對 をなすを賜わんことを求む、



司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ しよせいじん} 至聖至潔にして至 りて讚美たる我等の光 榮の女 宰、生 神 女、永 貞 童 女マリヤと、諸 聖 人

^{きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ} を記憶して、我等 己 の身及び 互 に 各 の身を以て、並 に 悉 くの我等の生命を以て、ハ

^{かみ いたく} リストス神に委託せん、



司祭) (黙誦: 言^い可^べから^みず、見^おる^うべ^かから^かざる^み奥^お密^うの^み神^つ、其^か内^みに^そ智^の慧^うと^ち知^え識^ちと^しの^き寶^たを^か秘^ら藏^ひする^ぞ者^う、我^もら^のわ^れら^のこ^のほう^じじ^{やく}けい^しし、なん^ぢお^おじ^んあい^よわれ^らざ^いに^んた^わつ^みし^{ゅう}じ^ん等^に此^の奉^じ事^の役^を啓^し示^し、爾^が多^くの^仁愛^に依^りて、我^等罪^人を^立て^て我^が罪^と衆^人の^過と^の爲^に爾^に獻^物と^祭と^を奉^らし^むる^者、見^る可^から^ざる^王、大^にし^て測^るべ^から^ず、光^榮に^して^奇妙^{なる}無^数の^事を^行う^主よ、爾^親ら、爾^の獨^生子^我が^神が、此^に備^えた^る畏^るべき^機密^{の中}に^安息^する、此^の聖^{なる}祭^壇の^前に、爾^がへ^ルヴ^イム^の寶^座の^前に^於ける^が如^く立^つ所^の我^等爾^が不^當の^僕を^顧みて、我^等及^び爾^が忠^信の^民を^不淨^{より}釋^き、奪^うべ^から^ざる^成聖^を以^て我^が衆^の靈^體を^聖にし、我^等が^潔き^こころ^はち^うお^もて^てら^こころ^もつ^こし^んみ^{ょう}せい^{ひん}う^{これ}い^て、此^の神^妙なる^聖品^を領^け、此^に活^かされ^て、爾^のハ^リス^トス、我^等の^眞の^神、吾^が肉^をを^食い^吾が^血を^飲む^者は^我に^居り、我^も亦^彼に^居ると^曰い^し者^に體^合する^を致^させ^給え、主^よ、願^くは^爾の^言は^我が^衷に^居り、且^つ行^うに^依り^て、我^等は^叩拜^せら^るる^爾が^至聖^神の^堂と^なり、或^は行[、]或^は言[、]或^は思^に行^わる^る凡^その^魔の^惡謀^を免^れて、古^世より^爾の^喜を^爲し^し諸^聖人^と偕^に、我^等に^約せ^し所^の福^樂を^受けん、)

主^宰よ、我^等に^勇を^以て、罪^を獲^ずして、敢^て爾^天の^神父^を籲^びて^言う^を賜^え、

てんに います われらの ちち い よ、ねがわくは なんちの なは せいと
天 在 我 等 父 願 爾 名 聖

せられ、なんちの くに はきた あり、なんちの むね は てんにおこ
爾 國 來 爾 旨 天 行

なわるるがごとく ちにも おこなわれん。わがにち しょうのかてを
如 地 行 我 日 用 糧

こんにち われらにあたえたまえ。われらにおいめあるものをわれら
今日 我 等 與 給 我 等 償 者 我 等

ゆるすがごと おく、われらのおいめをゆるしたまえ。われ
 免 如 我 等 償 免 給 我
 らをいざないにみちびか あず、な おわれらをきょうあくより
 等 誘 導 猶 我 等 凶 惡
 すくいたま あえ。
 救 給

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ
 蓋 國と權能と光榮は爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

ア ミ ン。

司祭) しゅうじん へいあん
 衆 人に平安、

な んぢのしんにも。
 爾 父の神にも。

司祭) われら こうべ しゅかが
 我等の首を主に屈めん、

しゅ な んぢに、しゅ な んぢに。
 主 爾 父に、主 爾 父に。

司祭) (黙誦: ひとりぜん あいれん かみ たか お いやし のぞもの あいれん めもつ なんぢ しゅう
 獨善にして愛憐なる神、高きに居り卑きを臨む者よ、愛憐の目を以て爾の衆

民を顧みて之を護り、及び我等衆人に、罪を致さずして、此の爾の生命を施す機密を領

くるを賜え、蓋我等爾の豊なる慈憐を待みて、爾の前に首を屈めり、)

なんぢ どくせいし おんちよう じれん じんあい よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ
 爾が獨生子の恩寵と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す

なんぢ しん とも さんよう いま いつ よよ
 爾の神と偕に讃揚せらる、今も何時も世に、

ア ミ ン、ア ミ ン。

司祭) (黙誦: われら かみ なんぢ せい すまい なんぢ くに こうえい ほうざ
 主イイススハリストス我等の神よ、爾の聖なる住所と爾が國の光榮の寶座より

眷み給え、上には父と偕に坐し、此には見えずして我等と偕に居る者よ、來りて我等を聖に

し、^{なんぢ けんとう て もつ なんぢ しじょう たい しそん ち われら さづ またわれら もつ}爾の權能の手を以て、爾が至淨の體と至尊の血とを我等に授け、又我等を以て
^{しゅうじん さづ たま}衆人に授け給え、)

^{つつし き さき せい せい もの せい ひと}謹みて聽くべし、先に聖にせられし聖なる物は聖なる人に、

せいなるはただひとり、しゆなるはただひとり、かみちちの
 聖 唯 獨 主 唯 獨 神 父
 こうえいをあらわす イスハリストスなり、ア ミ ン。
 光 榮 を 顯 す イスハリストス なり、ア ミ ン。

司祭) (黙誦: ^{かみ こひつじ さ わか かれ さ ぶんり つね くら なが つ すなわち}神の羔は剖かれ分たる、彼は剖かれて分離せず、恆に食われて永く盡きず、乃
^{う もの せい}領くる者を聖にす、)

※ 次の領聖詞を、天幕が開くまで繰り返し歌う。

てんのかてとせいめいのしゃくをあぢわえよ、
 天 の 糧 と 生 命 の しゃ ぐ を あ ぢ わ え よ 、
 てんのかてとせいめいのしゃくをあぢわえよ。
 天 の 糧 と 生 命 の しゃ ぐ を あ ぢ わ え よ 。
 しゆのいか に じんじなるをみん。
 主 如何 に 仁 慈 を 見

※天幕が開いたら下に移る。

司祭) ^{かみ おそ こころ しん もつ ちか きた}神を畏るる心と信とを以て近づき來れ、

われいづれのときにもしゆをほめあげん。かれをほむるはつねにわが
 我 何 の 時 主 を 讃 揚 彼 を 讃 恒 我
 くちにあ
 口 ち に あ

全員) ^{しゆ われしん かつう みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく ため よ}主よ、我信じ且受け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが爲に世に

きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ しじょう たい こ
 来りし者となす、衆 罪人の中我 第一なり、又 信ず、此れは 乃 爾 が至 淨の體、此れは
 すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゆう じゆう ことば
 乃 爾 が至尊の血なりと、故に 爾 に祈る、我を 憐 み、我が自由と自由ならずして、言 と
 おこない し し おか しょざい ゆる たま ならび われ ていざい なんぢ しじょう
 行 にて、知ると知らずして、犯しし諸 罪を赦し 給え、並 に我に定 罪なく、爾 が至 淨な
 きみつ う つみ ゆるし えいせい う いた たま
 る機密を領けて、罪の 赦 と永 生とを得るを致させ 給え、アミン。

かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ きみつ つ
 神の子よ、今 我を 爾 が機密の筵に 與 る者として容れ 給え、蓋 我 爾 の仇に機密を告げ
 またなんぢ ごと せつぶん な すなわちうとう ごと なんぢ う みと い しゅ
 ざらん、又 爾 にイウダの如き接 吻を爲さざらん、乃 右盜の如く 爾 を承け認めて曰う、主よ、
 なんぢ くに おい われ きおく
 爾 の國に於て我を記憶せよと、

しゅ いの なんぢ せい きみつ う わ ため しんあんあるい ていざい すなわちれい たい
 主よ、祈る、爾 の聖なる機密を領くるは、我が爲に 審 案 或 は定 罪とならず、乃 靈・體
 いやし
 の 醫 とならんことを、アミン。

※ 信徒領聖の間、領聖詞を繰り返し歌う。

て んの か て と せ い め い の しゃ く を あ ぢ わ え よ 、
 天 の 糧 と 生 命 の 爵 を 味 ぢ わ え よ 、

て んの か て と せ い め い の しゃ く を あ ぢ わ え よ 。
 天 の 糧 と 生 命 の 爵 を 味 ぢ わ え よ 。

しゅの いか に じんじなるを み ん。
 主 如何 に 仁 慈 なる を 見

※信徒領聖が済み、全員が元の位置に戻ったら下の「アレルイヤ」を歌う。

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

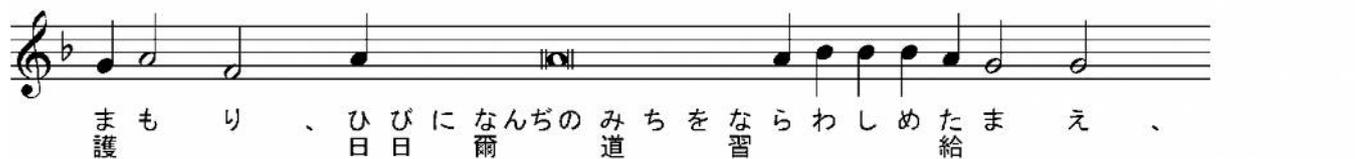
司祭) 神よ、爾 の民を救い、及び 爾 の嗣業に福を降せ、

てんのかてとせいめいのしゃくをあぢわえよ、しゅのいかにじんじなるをみん。
 天 糧 と 生 命 の 爵 を 味 ぢ わ え よ 、 主 如何 に 仁 慈 なる を 見

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦： ^{われら かみ つね あが ほ}我等の神は恒に崇め讃めらる、)

^{いま いつ よよ}
今も何時も世に、



司祭) ^{つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ} 謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖機密を

^{う よろ しゅ かんしゃ}
領けて、宜しく主に感謝すべし、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

司祭) ^{こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み} 此の晩の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に各の身

^{もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく}
を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ^{けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



司祭) ^{へいあん} 平 安^いにして出づべし、



司祭) ^{しゅ いの} 主 に 禱 らん、



司祭) ^{ちえ もつ ばんぶつ つく しゅさい ぜんのうしゃ なんぢ い がた おもんばかり おお じんじ もつ} 智 慧 を 以 て 萬 物 を 造 り し 主 宰、^え 全 能 者、^{われら こい とうと ひ みちび い たましい からだ けつじょう しょよく つつしみ ふくかつ きぼう} 爾 の 言 い 難 き 慮 と 多 く の 仁 慈 と を 以 て、
^え 我 等 を 此 の 至 と 尊 き 日 に 導 き 入 れ て、^{しゅ しじゅうにち もつ かみ する もんじ せきばん なんぢ ぼく きづ たま} 靈 と 體 と の 潔 淨、^{しぜんしゃ われら よ こうろう と ものいみ みち へ ふたごころ しん まも み へび} 諸 愆 の 節 制、^{かしら やぶ つみ か もの あら ていざい せい ふくかつ いた これ ふくはい} 復 活 の 冀 望 を
^え 得 せ し め ん と す る 主、^え 四 十 日 を 以 て 神 が 録 せ し 文 字 の 石 版 を 爾 の 僕 モ イ セ イ に 授 け 給 い し
^え 至 善 者 よ、^え 我 等 に も 善 き 功 勞 を 遂 げ、^え 齋 の 程 を 經、^え 貳 なら ざる 信 を 守 り、^え 見 え ざる 蛇 の
^え 首 を 壊 り、^え 罪 に 勝 つ 者 と 顯 わ れ、^え 定 罪 せ ら る る な く、^え 聖 なる 復 活 に 至 り て 之 に 伏 拜 する を
^え 得 せ し め 給 え、^え 蓋 父 と 子 と 聖 神 の 至 尊 至 嚴 の 名 は 讚 揚 讚 榮 せ ら る、^え 今 も 何 時 も 世 世 に、



誦經) ^{われいづ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わ くち あ わ たましい しゅ もつ ほこ} 我 何 れ の 時 に も 主 を 讚 め 揚 げ ん、^え 彼 を 讚 む る は 恒 に 我 が 口 に 在 り、^え 我 が 靈 は 主 を 以 て 誇 ら

おんじゅう もの き たの われ とも しゅ どうと とも かれ な あが ほ われかつ
 ん、温 柔 なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を 尊 め、偕に彼の名を 崇 め讃めん。我 嘗て
 しゅ たづ かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか たま め あ かれ
 主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての 危 きより我を 免 れしめ給えり。目を擧げて彼
 あお もの てら かれら おもて はぢ う こまづ ものよ しゅ き い
 を仰ぐ者は照されたり、彼等の 面 は愧を受けざらん。此の貧しき者呼びしに、主は聆き納れて、
 これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ おそ もの めぐ まも かれら たす あぢわ
 之を其 悉 くの艱難より救えり。主の 使 は主を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く。味
 しゅ いか じんじ み かれ たの ひと さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだし
 えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃む人は 福 なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋
 かれ おそ もの とぼ わか しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく
 彼を畏るる者は乏しきことなし。少き獅子は乏しくして餓え、唯 主を尋ぬる者は何の幸福に
 か しょうし きた われ き しゅ おそ おそれ なんぢら おし ひと い のぞ
 も缺くるなし。小子よ、來りて我に聽け、主を畏るる 畏 を爾等に訓えん。人、生きるを望み、
 またながら こうふく み ほつ なんぢ した あく なんぢ くち いつわり ことば とど
 又 壽 えて幸福を見んことを欲するか、爾の舌を惡より、爾の口を 譎 の言より止めよ。
 あく さ ぜん おこな わへい たづ これ したが しゅ め ぎじん かえり そのみみ かれら よ
 惡を避けて善を行い、和平を尋ねて之に従え。主の目は義人を 顧 み、其耳は彼等の呼ぶ
 き ただしゅ おもて あく な もの むか そのな ち ほろぼ ため ぎじん よ しゅ これ
 を聴く。唯主の 面 は惡を爲す者に對う、其名を地より 滅 さん爲なり。義人は呼ぶに、主は之
 き かれら ことごと うれい まぬか しゅ ころろ いた もの ちか たましい へりくだ もの
 を聴き、彼等を 悉 くの憂より免れしむ。主は心の傷める者に近し、 靈 の謙る者
 すく ぎじん うれいおお しか しゅ これ ことごと まぬか しゅ かれ ことごと ほね
 を救わん。義人には憂 多し、然れども主は之を 悉 く免れしめん。主は彼が 悉 くの骨
 まも そのいつ お あく ざいにん ころ ぎじん にく もの ほろ しゅ そのしょぼく たましい
 を護り、其 一も折れざらん。惡は罪人を殺し、義人を憎む者は亡びん。主は其諸僕の 靈
 すく かれ たの もの ひとり ほろ
 を救い、彼を頼む者は一人も亡びざらん。

司祭) 主に禱らん、



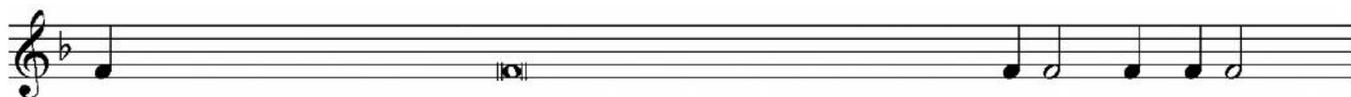
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

司祭) ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、



こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世



し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ せ 。
主 憐 主 憐 主 憐 福 降

司祭) ハリス^{われら}トス^{まこと}我等^{かみ}の^{そのしじょう}真^{はは}の^{われら}神^{せいしんぶもんどうしゃ}は、其^{せい}至^ぎ淨^{かみ}なる^{そふぼ}母^{およ}、(某)、我等^{およ}の^{しよせいじん}聖^{きとう}神^よ父^{われら}問^{あわれ}答^{すく}者^{すく}グリゴ^{すく}リイ、

聖^{せい}にして^ぎ義^{かみ}なる^{そふぼ}神^{およ}の^{およ}祖^{しよせいじん}父^{きとう}母^よイ^{われら}オ^{あわれ}ア^{すく}キ^{すく}ム^{すく}及^{すく}び^{すく}ア^{すく}ン^{すく}ナ、及^{すく}び^{すく}諸^{すく}聖^{すく}人^{すく}の^{すく}祈^{すく}禱^{すく}に^{すく}因^{すく}り^{すく}て^{すく}我^{すく}等^{すく}を^{すく}憐^{すく}み^{すく}救^{すく}わ

ん、^{かれ}彼^{ぜん}は^{ひと}善^{あい}にして^{しゆ}人^{しゆ}を^{しゆ}愛^{しゆ}する^{しゆ}主^{しゆ}な^{しゆ}れば^{しゆ}なり、



ア ミ ン 。



か み よ 、 わ が く に の て ん の う 、 お よ び く に を つ か さ ど る
神 我 國 天 皇 及 國 司



も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ き よ う ダ ニ イ ル 、 だ い し ゆ き よ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び
者 我 等 府 主 教 大 主 教 及



こ と ご と く の せ い き よ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン 等 を 、 い く と せ に も ま も り
悉 正 教 等 幾 歳 護



た ま え 。